

木造赤坂遺跡と伊勢平氏・平正度

水 橋 公 恵

木造赤坂遺跡の所在する津市木造町は、その地名が示すように、伊勢平氏ゆかりの荘園「木造庄」¹⁾が置かれていた地である。平成17～19年度の発掘調査では、陶質土器に代表される古墳時代の遺構・遺物の発見が話題となったが、「木造庄」との関係では、平安時代後期²⁾の遺物が大量に出土していることが注目される。

平安時代後期の最も重要な遺構としては、e地区で検出された二重の区画溝が挙げられる。大部分が調査区域の西側外部にあたるため、区画内部の状況については明らかでないが、築地塀や土塀のような遮蔽施設で囲われた立派な屋敷地（報告書の屋敷地A）と考えられる。その内溝からは大量の遺物が出土しており、とりわけ土師器³⁾食膳具（皿類）の集中的な廃棄は、儀式や饗宴を想像させる。

平安時代後期（概ね11世紀）といえ、伊勢平氏の祖・平維衡の子で、「木造庄」の開発領主として知られる平正度が「斎宮寮頭」であった長和4年（1015）を含んでいるので⁴⁾、この屋敷地や大量の遺物をそのまま正度の開発と関連付けて考えたいところである。

しかし、一口に11世紀頃といっても100年ほどの歳月が含まれており、その最初と最後では、正度とその孫の代ほどの開きがある。したがって、特定の人物との関連を論ずるには、更に時期を絞り込むことが必要であろう。そこで、屋敷地のより詳細な年代的位置づけのために、まずはその前提作業として出土土器の編年⁵⁾を幾分整備し、その上で屋敷地の性格などを考えてみたい。

1 屋敷地の時期的検討

ここでは、比較的まとまりのある良好な遺構出土品で土師器の変遷をとらえ、共伴する広域流通品（灰釉陶器など）を用いて暦年代を推定する。

木造赤坂遺跡における平安時代の土師器変遷

【1期】SK957出土品以外にまとまりのある資料はないが、新しい時期の遺構からもこの時期の土器

が散発的に出土している。土師器食膳具は杯と皿で、すべて非ロクロ成形である。杯・皿の器壁は厚く、底部は平らで、体部の開きは比較的弱い。雲出川流域を中心とした中勢地域に特徴的な形態である。共伴の須恵器だけで時期を細かく絞り込むことは難しいが、周辺の雲出島貫遺跡SZ502⁶⁾で、これより古く見える土師器に共伴している猿投窯系須恵器が手掛かりとなる。猿投窯では、最初期の緑釉陶器素地の出土から、操業年代の一端を815年頃におくことができるNN265号窯⁷⁾で類品が焼成されていることから、雲出島貫遺跡SZ502出土品を9世紀前半に比定できる。1期の土器は、このSZ502出土品よりも新しく、2期の土器よりも古い様相を示しているため、その年代を概ね9世紀後半に位置づけるのが妥当であろう。

【2期】SD42出土品を基準とする。他に、SD109・SD704などの新しい溝からもこの時期に属する土器が出土している。土師器食膳具は杯と皿で、すべて非ロクロ成形である。杯の口径（口縁部最大径）は13～16cm台で、特に14cm前後に集中する。杯には2つの形態がある。一つは、底部が平らで、器壁は厚く、口縁部にかけて直線的に開くもの。形態的には1期の杯の延長線上に位置しているが、器壁は若干薄く、口縁部の開きは大きくなっている。もう一つは、器壁が薄く、底部が丸みを帯び、口縁部へ彎曲しながら開くもの。斎宮跡出土品に類似する形態で、斎宮編年⁸⁾第Ⅱ期第4段階に比定できる。

共伴の遺物には灰釉陶器と緑釉陶器がある。灰釉陶器の椀・皿は、器壁が薄く、いわゆる「三日月高台」をもつものが大半を占める。施釉方法が判るものの多くはハケ塗り、体部下半は内外面とも露胎のものが目立つ。口径は約12～18cm台で、椀・皿ともに14cm前後に集中する。このような様相は、元慶8年（884）に焼失した尾張国分寺の焼け瓦が、裏込めに使用された堀之内花ノ木遺跡の井戸SE03出土品⁹⁾に類似しており、平安京で「天曆七」年（953）の墨

書銘をもつ緑釉陶器と共伴しているもの¹⁰⁾よりも明らかに古い。したがって、2期の年代は、概ね10世紀前半に位置づけられよう。平安京で10世紀の土師器に伴って出土するものと同じ様な近江産緑釉陶器¹¹⁾が共伴していることも、年代的に大きく矛盾しない。

【3期】代表的なものに、SD501・SD710・SD987・SD1081出土品がある。土師器食膳具は皿¹²⁾(無台)と台付皿で、どちらも非ロクロ成形とロクロ成形のものがある。非ロクロ成形の皿は、やや薄手で口縁部が外反するものも少量含まれるが、比較的厚手で体部に丸みを帯びるものが多い。口径分布は、成形手法を問わず、台付皿は10・11cm台と15・16cm台に集中域があり、無台の皿はその間の13cm付近にも若干集中する。なお、ロクロ成形の台付皿は口径10cmを境に、小さいものは柱状高台に、大きなものは貼り付け高台となる。また、量は少ないが、ロクロ成形の甕や鉢もある。このような器種構成や器形の特徴は、斎宮編年第Ⅲ期第1段階の基準資料であるSE4050上層出土品との類似性が高い。

共伴の灰釉陶器には、碗・深碗・皿などがあり、施釉方法がわかるものは全て漬け掛けで、高台内には糸切り痕が残るものが多い。9世紀以来の伝統的な形態の碗や皿は、口径の縮小化が進んでおり、碗では12～13cm前半台に分布の中心がある。皿では、10cm後半台のものが目立ち、高台は糸切りされた底部の外側へはみ出した位置に貼り付けられている。深碗は出土量が少ないが、口径16cm前半台のものがあり、腰の丸みはやや弱い。いずれも緻密な胎土から東濃窯製品と考えられるもので、明和30号窯出土品¹³⁾などとの共通性が高い。類品は平安京左京二条三坊九町SE273中層¹⁴⁾から出土しており、この遺構の土師器は、治安元年(1021)に藤原頼道が造営した高陽院の池の埋土最下層にあたる平安京左京二条二坊九町高陽院跡SG1-A出土品¹⁵⁾との類似性が非常に高い。高陽院跡SG1-Aは、その上を長暦3年(1039)の火災に伴うと考えられる焼土層が覆っていることから、出土遺物には1021～1039年の暦年代が与えられている。つまり、平安京での出土実態から3期の年代は、1020～1050年頃に位置づけることが妥当であろう。

【4期】代表的な遺物群として、SD964・SK505

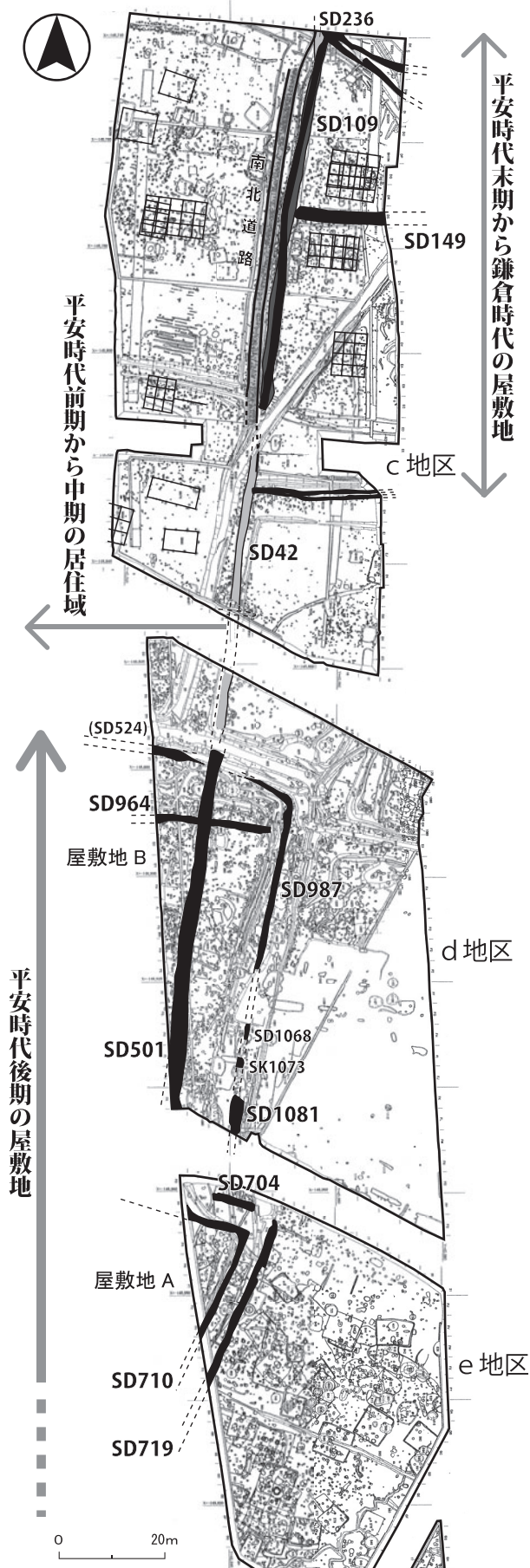
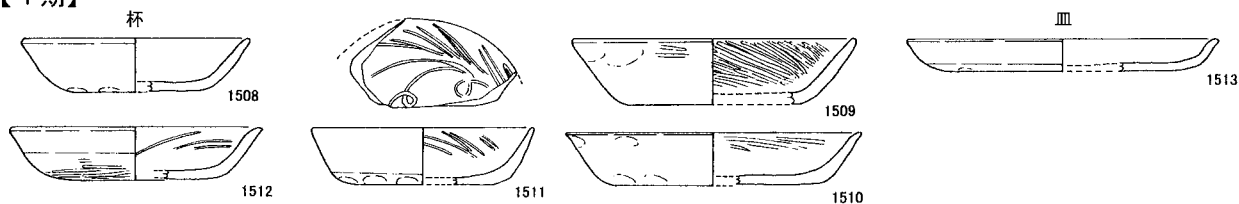
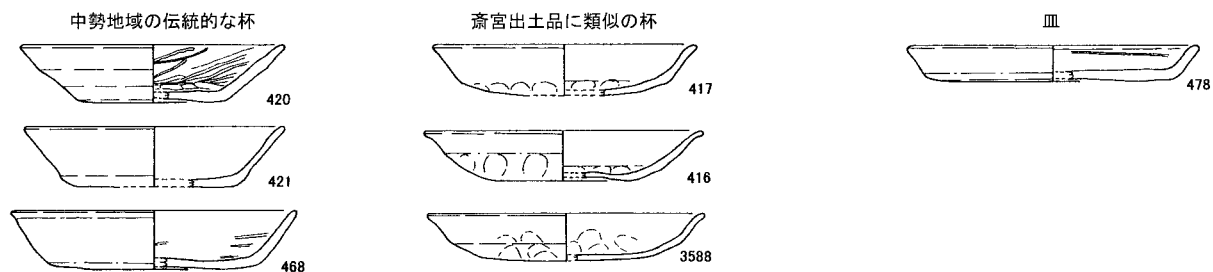


図1 木造赤坂遺跡の屋敷地

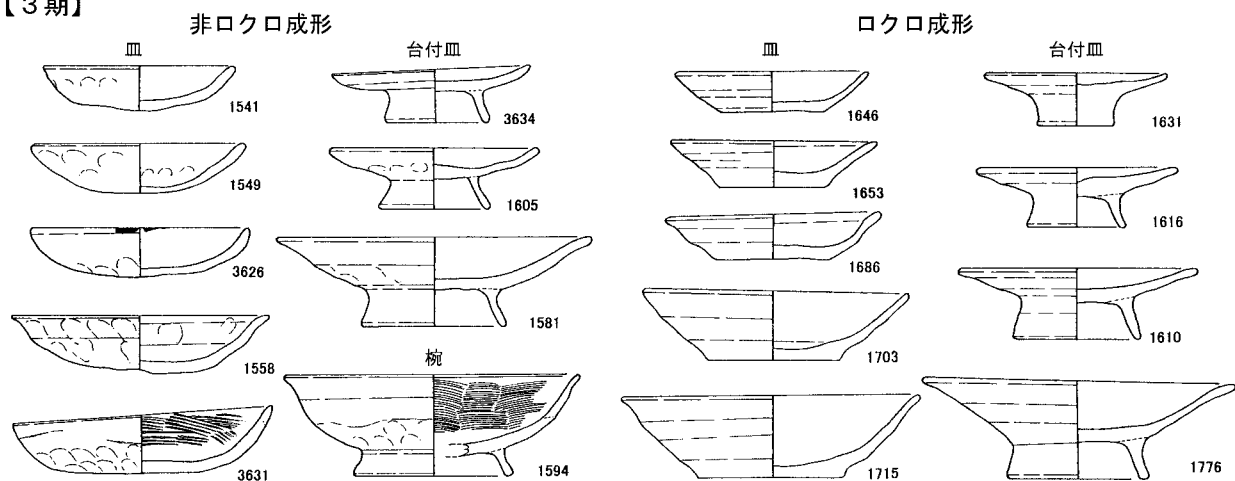
【1期】



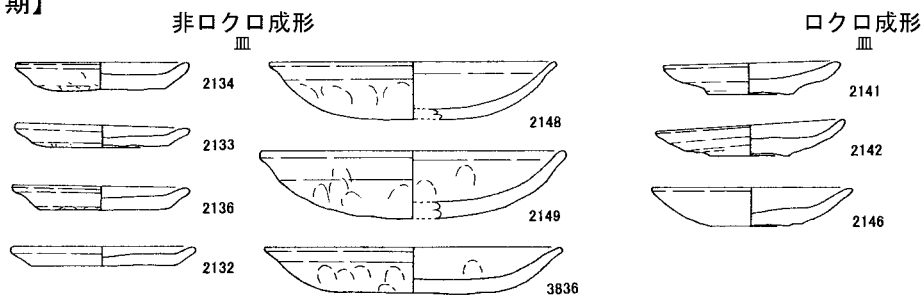
【2期】



【3期】



【4期】



【5期】

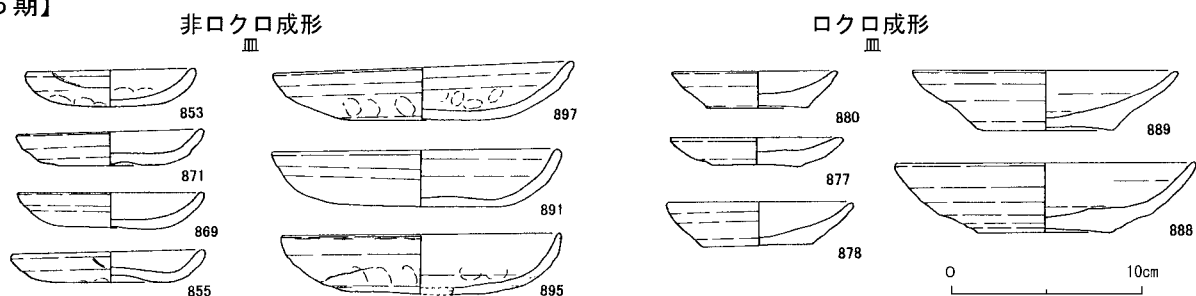


図2 木造赤坂遺跡の土師器の変遷 (1:4)

出土品が挙げられるほか、S D719のうち新相を呈する一群が該当する。土師器食膳具は大半が無台の皿で、ロクロ成形と非ロクロ成形のものがあるが、3期よりもロクロ成形のものの割合は減少し、小皿が目立つ。非ロクロ成形の皿は、3期よりも厚手化しており、法量的には口径9cm前後の小皿と、15・16cm台の大皿に二極分化する。小皿は腰が明瞭に折れる浅い形状のもので、大皿には口縁部が外反する特徴が顕著に認められる。

共伴遺物としては東濃窯産の灰釉陶器碗と尾張系「山茶碗」¹⁶⁾がある。灰釉陶器碗は9世紀以来の伝統的な碗形態ではなく、「山茶碗」に繋がる新器形で、「灰釉山茶碗」とも呼ばれるものである。類品は、平安京左京四条二坊十四町S E 3108¹⁷⁾から出土しており、伴出の土師器は、延久三年(1071)に天台密教の安鎮法が修された際の南方鎮所跡と推定される平安宮内裏承明門地鎮遺構(遺構76)¹⁸⁾出土品との類似性が高い。尾張系「山茶碗」は藤澤良祐氏による山茶碗編年¹⁹⁾の第3型式に相当するもので、類品は木柾内から「寛治五年」(1091)銘須恵器鉢が出土した平安京左京四条一坊六町S E - 8²⁰⁾の掘り方(木柾の外)から出土している。紀年銘須恵器鉢とは厳密な共伴関係にはないものの、木柾内外の埋土から出土した土師器皿にそれほど年代的な隔たりは認められない。したがって、4期は1071年

をやや遡る時期から1091年を含むと考えられ、前後に若干の幅を考慮するならば、11世紀後半から12世紀初頭に位置づけることが許されよう。

【5期】代表的な遺物群として、S D149・S K159出土品が挙げられるほか、S D109出土品のうち新相を呈する一群が該当する。土師器食膳具はほとんどが無台の皿で、ロクロ成形のものも少量あるが、非ロクロ成形のものが大半を占める。非ロクロ成形の皿は、9・10cm前後と15・16cm前後に集中しており、口径分布の上では4期と大差ないが、二段のナデが施された口縁部の内彎傾向が特徴的である。

共伴遺物には、「山茶碗」と白磁碗があり、「山茶碗」には山茶碗編年第4型式に相当する大小の碗がある。類品は、1130～1148年に相次いで起きた災害(火災・浸水)に関連すると推定されている内膳町遺跡(平安京左京北辺三坊六町)S E 176下層²¹⁾出土品に含まれており、共伴の土師器の様相も、S D149やS K159のものと極めて近い。したがって、前後に若干の幅をもたせるならば、5期については概ね12世紀第2～3四半期と考えられ、これは大宰府中国陶磁器分類²²⁾のIV類に比定される共伴の白磁碗の年代観とも矛盾しない。

屋敷地の年代観

この土師器変遷観に基づいて、屋敷地の年代を考えてみたい。問題の屋敷地Aを取り囲む区画溝には

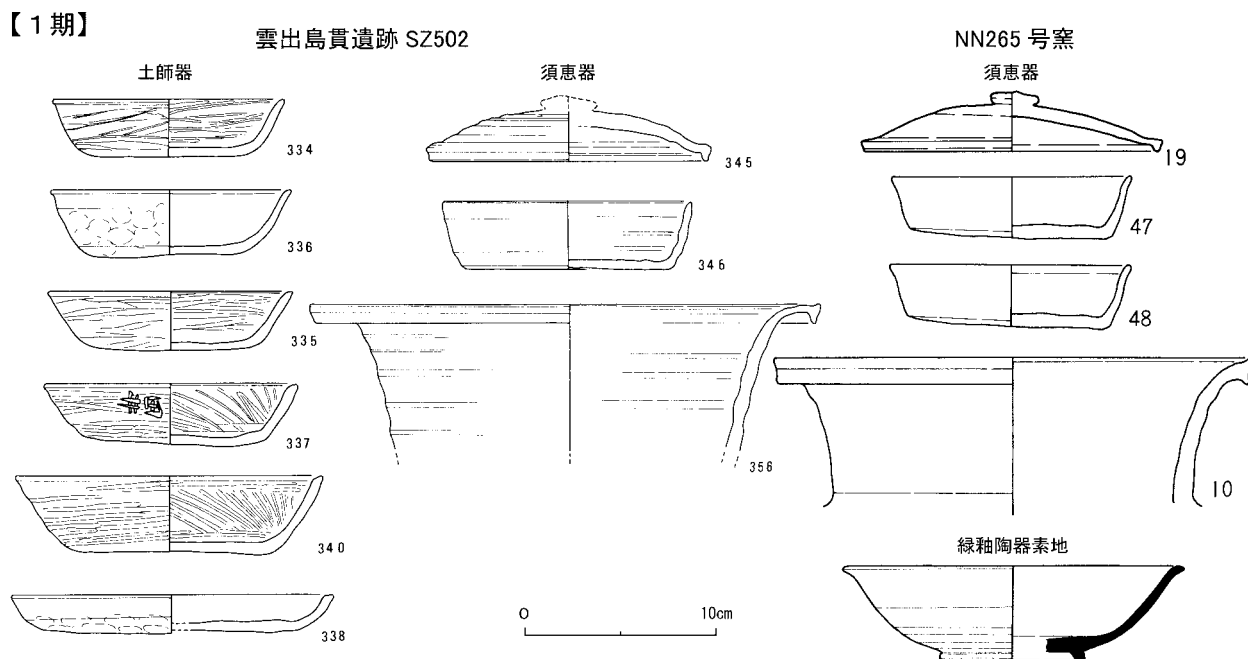
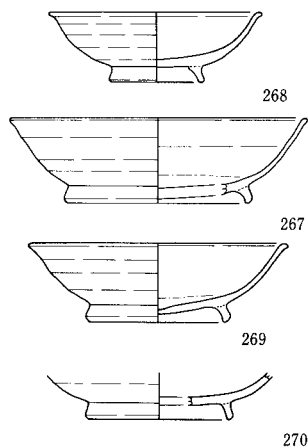


図3 時期検討比較資料(1期)

【2期】

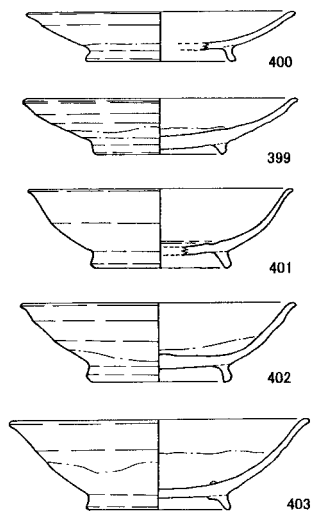
堀之内花ノ木遺跡 SE03

灰釉陶器



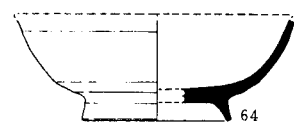
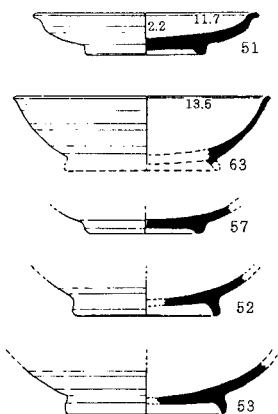
木造赤坂遺跡 SD42

灰釉陶器

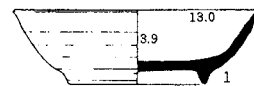


平安京右京二条二坊三町 SX1

灰釉陶器

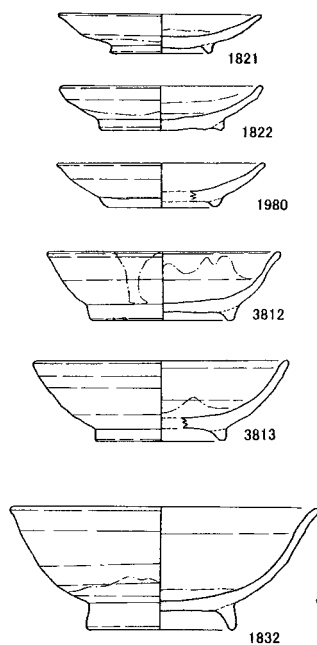


緑釉陶器



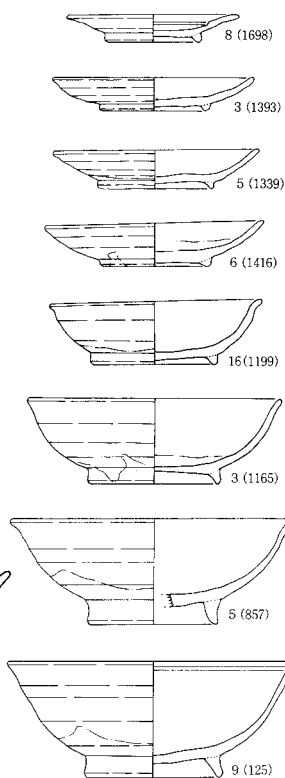
【3期】

木造赤坂遺跡
SD501・SD710・SD1081
灰釉陶器



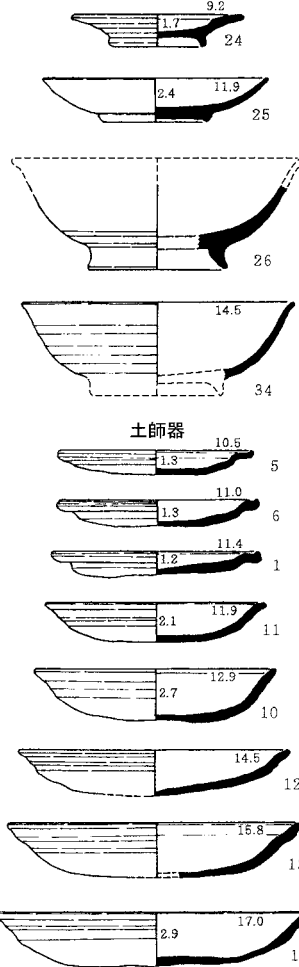
明和 30 号窯

灰釉陶器



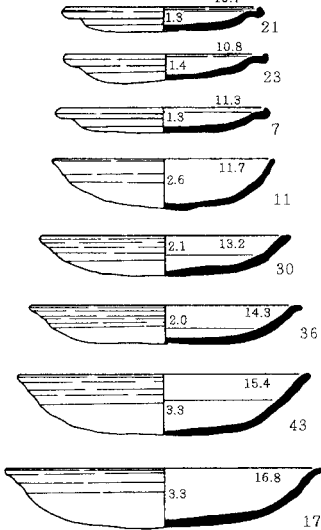
平安京左京二条三坊九町
SE273 中層

灰釉陶器



平安京左京二条二坊九町
高陽院 SG1-A

土師器



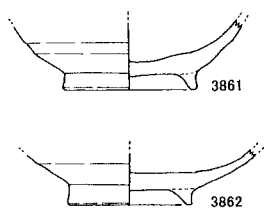
0 10cm

図4 時期検討比較資料（2・3期）

【4期】

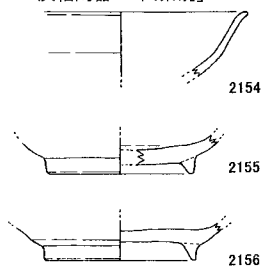
木造赤坂遺跡 SD719

灰釉陶器



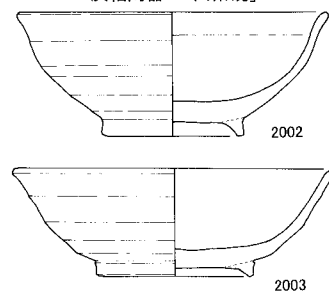
木造赤坂遺跡 SD964

灰釉陶器・「山茶碗」



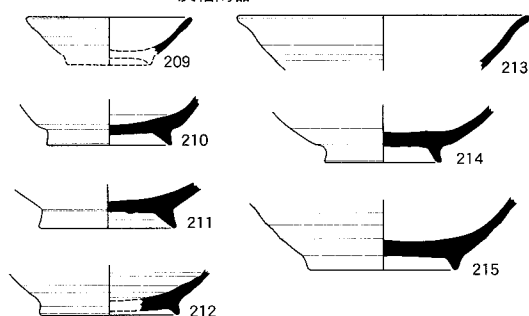
木造赤坂遺跡 SK505

灰釉陶器・「山茶碗」

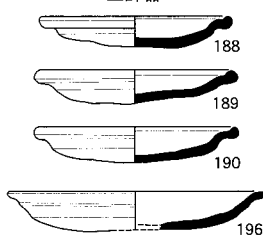


平安京左京四条二坊十四町 SE3108

灰釉陶器

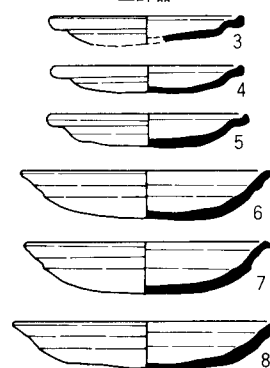


土師器



平安宮内裏 遺構 76

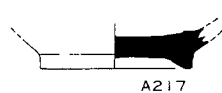
土師器



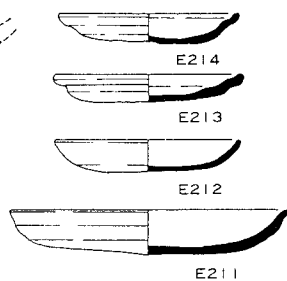
平安京左京四条一坊六町 SE-8

SE-8掘り方

「山茶碗」

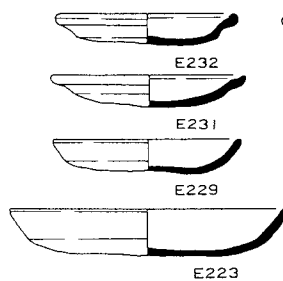


土師器

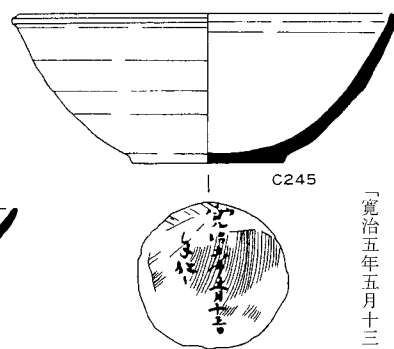


SE-8淡緑灰色泥砂（木柁内埋土）

土師器



須恵器

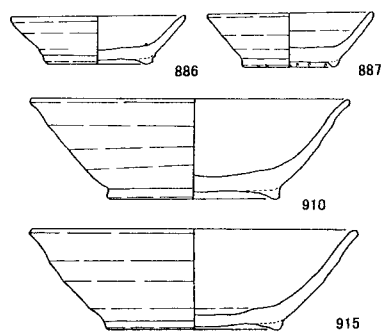


〔寛治五年五月十三日〕

【5期】

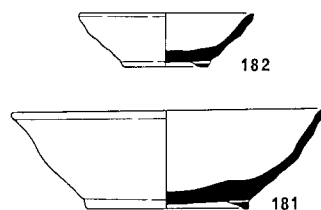
木造赤坂遺跡 SD149

「山茶碗」

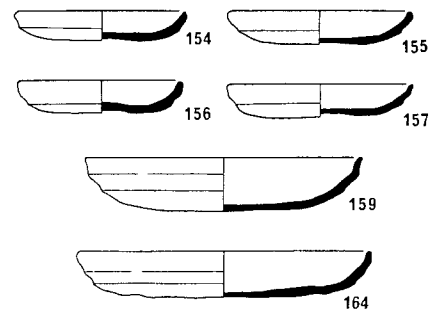


内膳町遺跡 SE176 下層

「山茶碗」



土師器



0 10cm

図5 時期検討比較資料（4・5期）

内溝SD710と外溝SD704・SD719がある。

SD710 屋敷地を囲う二重区画溝の内溝で、大量の土師器皿類のほか、灰釉陶器も少量出土した。大量に廃棄されていた土師器は、3期に属する。

SD704 屋敷地を囲う外溝の東西部分で、3期に属する非ロクロ成形土師器台付皿、ロクロ成形土師器皿・台付皿、灰釉陶器碗などが出土した。そのほかに、2期の土師器杯も出土しているが、多くは表面が磨耗したり細片化しており、古い時期の遺物の混入と考えられる。

SD719 屋敷地を囲う外溝の南北部分で、土師器・灰釉陶器・白磁などが出土した。明らかな混入品を除くと、土師器は3期と4期のものが含まれており、共伴の灰釉陶器や白磁の内容とも対応している。おそらくSD710・SD704よりも長く開口していたのであろう。

以上、屋敷地を囲う二重の区画溝から出土した土器の多くは、基本的に3期に属するものではないかと考えられた。つまり、平正度が「斎宮寮頭」であったことが史料からわかる長和4年(1015)と極めて近い時期に屋敷地周辺において大量の土師器類が使用されていたことになり、年代的にはほぼ一致していると評価することができる。

とは言っても、平正度が「木造庄」に屋敷を構えていたのかどうか、仮に屋敷があったとしても、それがどこであったのかが明らかでない以上、年代の一致は単なる偶然かもしれない。そこで、大量の土師器を用いて饗宴をするような屋敷という以外に、何か屋敷の主を特徴づけるような遺物がないかを次に考えてみたい。

2 特筆すべき遺物

まず注目したいのは、大量に出土した3期の土師器の様相が、斎宮と高い共通性をもっていることで

ある。もともとの雲出川流域の土師器は地域色が非常に濃厚で、1期の土師器は斎宮跡出土品とまったく似ていない。それにもかかわらず、3期になって極めて類似性が高くなるということは、それ自体が斎宮との関係の深さを示しているようである。平正度が「木造庄」の開発領主であると共に、斎宮寮の官人でもあったことを考えれば、土器様相の類似性の背景に彼の存在を想定したくなるが、これだけで決めつけることにはまだ無理がある。ここは結論を急がず、もう少し斎宮との関係を検討してみたい。

実は、木造と斎宮の密接な関係を示す遺物は他にもある。越州窯系青磁と滑石製の耳付石鍋である。

越州窯系青磁 杯 (1981)

越州窯系青磁は、後漢代から北宋代に中国浙江省一帯で焼かれた青磁で、遅くとも9世紀前半には日本へ将来されているが、その後中世に多く出回る龍泉窯系や同安窯系の青磁とは異なり、北部九州や平安京跡周辺といった限られた場所以外での出土例は極端に少ない²³⁾。古代三関の外に位置する東海地方にあつては、平安京と特に密接な関係を有する斎宮跡が突出した出土量を誇るが、1970年以降の40年間に合計21万㎡以上もの面積を調査しているにもかかわらず、その確認数は60点あまり²⁴⁾にすぎないという。管見の限りでは斎宮跡以外での県内出土例は東裏遺跡²⁵⁾の碗などほんの数例しかなく、今後、事例が増えたとしてもその希少性は変わらないであろう。

問題は、そのように貴重な越州窯系青磁が、木造赤坂遺跡から出土することの歴史的背景であるが、まずはこの遺物の詳細な時期を確認しておく。

出土した越州窯系青磁は、体部外面の線刻と口縁部の切り欠きによって輪花が表現された杯の口縁部

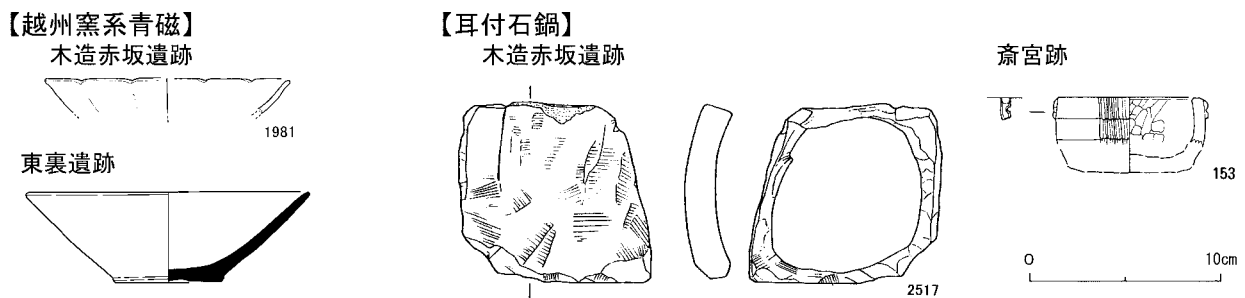


図6 越州窯系青磁と耳付石鍋

で、d地区で検出された屋敷地Bの外周区画溝SD1081から出土した。SD1081は、3期の代表的な遺構の一つであるため、1020～1050頃に位置付けることができる。しかし、出土した越州窯系青磁は一辺2cm程度の小さな破片であるため、混入遺物の可能性も考えられる。そこで、他遺跡における類品の出土事例からも遺物の時期を確認しておきたい。

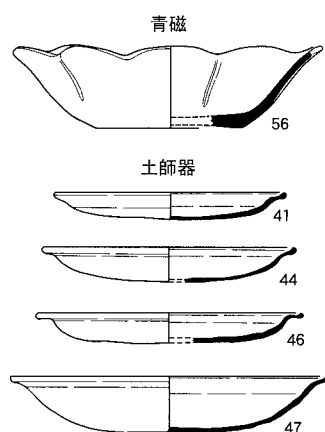
出土品で見る限り、平安京周辺にもたらされている越州窯系青磁の量は、9世紀前半まではごく僅かで、その後、徐々に増加して、平安時代中期には貿易陶磁の大半を占めるようになるものの、中期末葉になると激減するという²⁶⁾。器形も、時代の移り変わりとともに変化しているが、木造赤坂遺跡で出土したような杯は、越州窯系青磁の中でもやや新しい

時期の遺構から出土する傾向にあるようで、共伴した土師器の年代観から時期が推定できる出土例としては、平安京左京五条一坊十四町SD162²⁷⁾や左京四条三坊五町SE21²⁸⁾などが挙げられる。SD162の土師器は、天徳四年(960)の火災後の整理に伴うと考えられている平安宮内裏土壙SK25出土品²⁹⁾や、天禄四年(973)に焼亡した薬師寺西僧房の床面出土品³⁰⁾と類似しており、SE21のものはこれらと、前述の高陽院跡SG1-A出土品(1021～1039頃)の中間的様相を示している。したがって、概ね10世紀後半に位置づけられる。

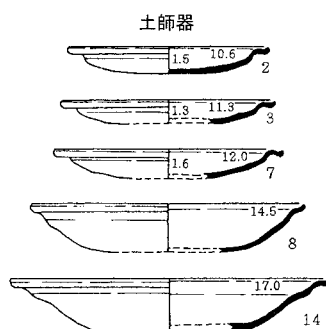
木造赤坂遺跡の出土例とは30～60年ほどの年代差があるが、越州窯系青磁ほどの貴重品であれば、その程度の伝世は特に問題とすることもないだろう。

さて、先ほど県内での越州窯系青磁の出土例とし

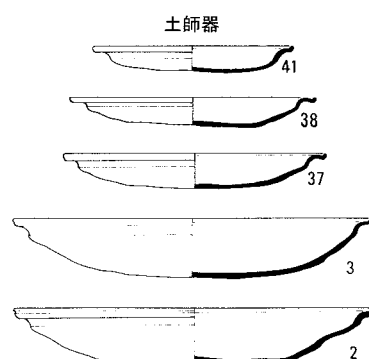
平安京左京五条一坊十四町SD162



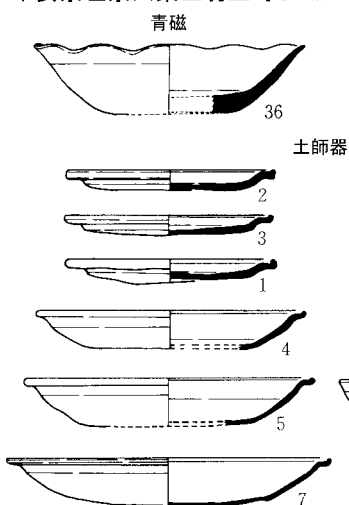
平安宮内裏SK25



薬師寺西僧房床面



平安京左京四条三坊五町SE21



平安京左京二条二坊九町高陽院SG1-A

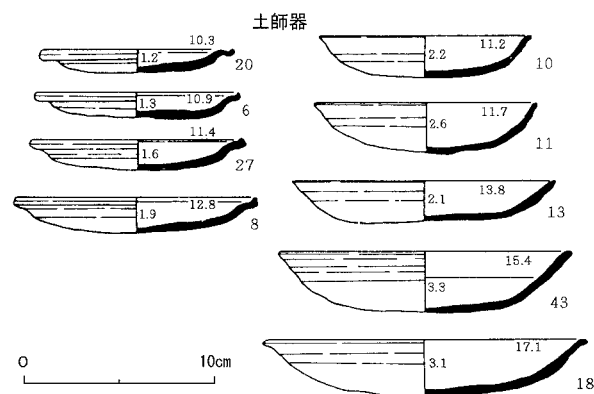


図7 越州窯系青磁杯の時期検討比較資料

て斎宮跡と東裏遺跡を挙げたが、東裏遺跡の例は、平安時代前期後半にみられる典型的な蛇の目高台の碗であり、木造赤坂遺跡のものとは年代的に隔たりがある³¹⁾。一方、斎宮跡出土例には、東裏遺跡のような古手のもの以外にも、比較的新しいものが確実に含まれており、平安時代中期や後期の遺構からも一定量が出土している³²⁾。

つまり、平安時代中・後期に限定すると、越州窯系青磁の確実な出土例³³⁾は、県内では木造赤坂遺跡と斎宮跡の2遺跡のみとなり、両者の密接な関係性がより確かなものに感じられるのである。

滑石製の耳付石鍋（2517）

滑石製の石鍋は、温石に転用されているが、もとは口縁部外面に方形の耳を削り出した形態の耳付石鍋である。類品の県内出土例は極めて少なく、報告されている事例としては、斎宮跡から出土した小型品1点だけである³⁴⁾。

木造赤坂遺跡で耳付石鍋が出土したS D907は、平安時代後期から江戸時代にかけて掘削された多数の区画溝が重複する場所にできた窪地である。また、斎宮跡出土例も柱穴群からの出土であり、ともに出土遺構から時期を判断することは難しい。

しかし、石鍋自体の形態から時期をある程度絞り込むことはできる。口縁部外側面に方形の耳を一對もしくは二対有する耳付石鍋については、中世に一般的な羽釜型の鐳付石鍋に先行するものとされており、概ね10・11世紀のものと考えることに異論はない³⁵⁾。

耳付石鍋は、最大の生産地である西彼杵半島³⁶⁾を含む肥前国や、観世音寺や海ノ中道遺跡など大宰府近辺といった北部九州で出土することが多い³⁷⁾のに対し、それ以外の場所では極端に少ない。都であった平安京でさえ、「平安時代に遡る報告例はない」³⁸⁾とされるほどであるから、さらに生産地から遠い三重県下での出土例が極めて少ないことは、特に不思議なことでもないだろう。

しかし、そうした珍しい遺物が、斎宮跡と木造赤坂遺跡の両方で確認されているということは、もはや単なる偶然では片付けられないように思われる。

入手経路と歴史的背景

いずれも状況証拠であるとはいえ、基本的な土器

様相の類似性に加えて、希少な遺物が2例も共通して認められることからすると、やはり木造赤坂遺跡と斎宮跡の間には、ただならぬ緊密な関係があったと考えるべきだろう。したがって、年代的な一致まで考え併せるならば、平正度の関与があった可能性は非常に高いと思われる。

そして、60点あまりに過ぎないとはいえ、県下での越州窯系青磁の出土が圧倒的に斎宮側に多いことからすると、平安京と密接な関係にあったが故に斎宮へもたらされた越州窯系青磁を、「斎宮寮頭」の立場を利用して平正度が入手し、「木造庄」へ持ち込んだのではないかと考えたくなるが、この入手経路については、なお検討を要する。

何故なら、もう一つの遺物である石鍋については、これとは違う入手経路が想定できるからである。先にもふれたが、平安時代の石鍋は、北部九州以外での出土例は極端に少なく、当時の都である平安京ですらその例外ではないことからすれば、少なくとも北部九州以外の地域で商品流通していたとはとても考えられない。実際、商品流通とは異なる個人的な繋がりによって平安京へ石鍋がもたらされている事が、『小右記』の記載を根拠に指摘されており³⁹⁾、木造や斎宮の石鍋についても、同じような搬入経路を想定すべきではないかと思われる。

そして、この点に関連して注目したいのは、正度の伯父たちが10世紀末に相次いで肥前守となっていること⁴⁰⁾と、正度の父・維衡が治安三年（1023）に鎮西へ下向している⁴¹⁾という事実である。大宰府周辺や肥前国はどちらも耳付石鍋の濃厚な分布域であるから、正度は彼ら（父や伯父達）を通して耳付石鍋を入手しやすい立場にあったといえるだろう⁴²⁾。

このように考えてくると、先程結論を保留した越州窯系青磁についても、まったく同じ搬入経路を想定することができる。なぜなら、北部九州は越州窯系青磁の濃厚な分布域でもあるからで、正度は親族を通して越州窯系青磁をも容易に入手できる立場にあったといえる。つまり、越州窯系青磁と石鍋は正度が「斎宮寮頭」だったからではなく、彼個人の同族的結合のなかで入手されていたのではないだろうか。そうだとすると、斎宮の越州窯系青磁と石鍋についても、逆の解釈、つまり正度こそが斎宮に越州

窯系青磁や石鍋を持ち込んだ張本人でないかという発想すらでてくる。

少々憶測めいた部分にまで踏み込んでしまったが、この時期の木造と斎宮に認められる数々の共通点からは、その背景に「木造庄」開発領主であり「斎宮寮頭」でもある平正度の濃厚な関与が窺える。木造赤坂遺跡で検出された3期の屋敷⁴³⁾の主が、平正度であった蓋然性は、やはり非常に高いと考えられるのである。

ところで、木造赤坂遺跡の2期と3期の間には時間的な断絶があり、3期の屋敷はいわば突如として出現したかのように見えるが、これは開発領主である正度の屋敷とする考え方と高い整合性を有している。また、3期以降に生活痕跡が継続して認められることも、「木造庄」がその後代々伝領されたという『久我家文書』の記載と一致していると見ることができる。

ただ、3期の屋敷の主を正度と考えた場合、若干気になるのは、3期以降の区画溝や道路が、2期には作られていた地割遺構の位置や方向性をかなり正確に受け継いでいることである。これは、正度が全くの荒野・原野を一から開発したのではなく、過去に一度開発されたものの、荒廃していた土地を改めて開発したことを意味しているのではないだろうか。

つまり、2期の段階には既に一旦開発されていたと考えられるが、ここで注目したいのは、その2期の土器様相である。先に述べたように、1期には斎宮出土品とはまったく似ていない地域色豊かな土師器が使用されていたにもかかわらず、2期には、この延長線上に位置する形態に加えて、数はそれほど多くはないが、斎宮跡出土品に類似の形態が現れている。後世まで踏襲される地割の基準となったこの開発自体は、新しい区画溝に混入している土器から見て、1期から始まっていた可能性もあるのだが、2期に斎宮との関係がみえてくるということは、この段階で斎宮（関係者）の関与があったことを示唆しているのではないだろうか。

これに関連して注目されるのは、木造には斎宮寮田⁴⁴⁾が存在していたことである。「木造寮田」の成立時期は明らかでないものの、文献史学側からは天

慶年間（938～947）に斎宮寮が「寮領」形成の動きを示すという指摘⁴⁵⁾があり、先に10世紀前半頃と推定した2期の年代観と矛盾はない。この「寮領」形成の動きとは、実際には斎宮寮の官人に任命された在京の中・下級貴族が留任⁴⁶⁾し、斎宮寮の権威を借りて土地所有の拡大を目指していたものらしいが、斎宮寮は10世紀後半には祭主・太神宮司の支配を受けることになるという⁴⁷⁾。そうであれば、彼ら（元々在京の中・下級貴族）の地域支配も停滞したのではないかと考えられ、これも2期と3期の間の衰退現象と一致しているように見受けられる。

つまり、平正度は、斎宮寮の官人という立場を利用して荒れていた寮田を再開発し、それを足掛かりに自領を形成していったのではないだろうか⁴⁸⁾。

今後の課題

調査成果を若干掘り下げて検討することによって、木造赤坂遺跡の平安時代後期の状況と、「木造庄」の開発領主であり「斎宮寮頭」でもあった平正度との関係を整合的に理解することができた。一方で、新たな問題が浮き彫りになってきた。

木造赤坂遺跡から出土した平安時代の土器を編年した際に、類例として挙げた斎宮跡S E 4050上層出土品は、3期の土器群との共通性が高く、ほぼ同時期と考えられる。しかし、S E 4050上層を標式遺構とする斎宮編年第Ⅲ期第1段階の年代は950～1000年とされており⁴⁹⁾、その後、若干新しくする意見が出されてはいるものの⁵⁰⁾、年代観の齟齬は小さくない。根拠についての再検討が必要であろうが、この点については木造赤坂遺跡の発掘調査報告書である本書で論ずるべき範囲を超えるため、ここでは問題点の指摘にとどめておく。当該時期における斎宮を含めた地域史を解明する上での、今後の大きな課題である。

本稿執筆の過程で、神戸大学名誉教授の高橋昌明先生から多大なご教示を賜ったほか、斎宮歴史博物館の榎村寛之氏からも様々なご指摘を頂戴しました。厚く御礼申し上げます。

【註】

- 1) 『久我家文書』には、「木造ハ先祖越前守正度の領」（安貞三年二月廿日、圓性平光盛讓狀案）「木造庄 平家根本領」（觀応元年八月十三日、久我長通讓狀）との記述があり、「木造庄」は「正度」に始まる平家根本領とされている。平正度が開発した時点では莊園ではないため、厳密には庄と呼ぶべきではないが、権門に寄進された正確な時期が不明で、呼び分けることが難しいため、ここでは便宜的に正度の私領の時点から「木造庄」と呼ぶことにする。
- 2) 本稿で使用する平安時代の区分は、土器編年に基づくもので、政治史など文献史学で使用される区分とは異なる。平安時代後期とは、平安京で主に使用された土師器に、器壁の厚手化、口縁部の外反傾向と二段ナゲが特徴として表れる段階で、概ね11世紀に該当する。
- 3) 本稿では、成形手法を問わず、ロクロ成形のもの（ロクロ土師器）をも含む概念として土師器という名称を使用する。
- 4) 平正度は、『尊卑分脈』には「斎宮助」とあるが、『小右記』（長和四年九月廿三日条）には「斎宮寮頭正度」との記載がある。頭でも助でも本論の論旨には影響ないので、ここでは『小右記』に登場する「正度」を平正度とする通説的見解に従い、便宜的に後者を使用する。
- 5) 雲出川流域を中心とした古代の中勢地域では、時期によっては地域色豊かな土師器が使用されていたことが、過去に調査された周辺遺跡の状況から判っている。
- 6) 三重県埋蔵文化財センター2001『嶋拔Ⅲ』
- 7) 名古屋市教育委員会1976『徳重西部土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』、尾野善裕1998「灰釉陶器生産技術の系譜」『榑崎彰一先生古希記念論文集』真陽社、同2003「古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産」『第7回シンポジウム 古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会
- 8) 斎宮歴史博物館2001『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』
- 9) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1994『堀之内花ノ木遺跡』
- 10) 上村憲章1993「平安京右京二条二坊三町S X 1」『古代の土器 2・都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会
- 11) 平尾政幸1994「緑釉陶器の変質と波及」『第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西東3—』古代の土器研究会
- 12) 当該期は皿と杯の区別が難しい過渡期にあたるため、報文中（Ⅷ）では杯とされたものも、形態的に大差なければ皿に含めた。
- 13) 多治見市教育委員会1990『明和古窯跡群発掘調

査報告書』

- 14) 平尾政幸1994「平安京左京二条三坊九町S E 273」『古代の土器 3・都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会
- 15) 平尾政幸1994「平安京左京二条二坊九町高陽院S G 1—A」『古代の土器 3・都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会
- 16) いわゆる「山茶碗」は、過去研究者によって異なる概念で用いられてきており、学術用語として問題がないとは言えないが、本稿では便宜的に瓷器系中世陶器第2類（白瓷系陶器）（榑崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1977）を指す名称として使用する。また、猿投窯・瀬戸窯・常滑窯の「山茶碗」は、胎土に一定の傾向は認められるものの、肉眼観察だけで厳密に三者を識別することは困難であるため、ここでは一括して尾張系と呼ぶこととした。
- 17) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京四条二坊十四町跡』（シリーズ番号2003-5）
- 18) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1986『平安京跡発掘調査概報 昭和60年度』
- 19) 藤澤良祐1982「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ、同1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 20) 平安京調査会1975『平安京跡発掘調査報告—左京四条一坊—』
- 21) 京都府教育委員会1980『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3）』
- 22) 横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4
- 23) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館1984『奈良・平安の中国陶磁—西日本出土品を中心として—』
- 24) 大川勝宏2010「斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要19』
- 25) 埋蔵文化財研究会1989『第26回埋蔵文化財研究集会 古代の対外交渉—古墳時代後期～平安時代前半の舶載品をめぐる—』
- 26) 堀内明博1994「第四部平安京の遺物 第二章土器と陶磁器 5 貿易陶磁」『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所編
- 27) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所2008『平安京左京五条一坊十四町跡』（シリーズ番号2008-4）
- 28) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所1982『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
- 29) 平尾政幸1993「平安宮内裏S K 25」『古代の土器 2・都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会
- 30) 奈良国立文化財研究所1987『薬師寺発掘調査報告』
- 31) 朝見遺跡（松阪市和屋町）からも蛇の目高台の碗が出土している（三重県埋蔵文化財センター

- 2011「朝見遺跡第二次発掘調査現地説明会資料」。
- 32) 前掲註24)
- 33) 堀田遺跡(松阪市嬉野宮古町)出土例(輪高台の碗)は、形態的には平安時代中期にまで降る可能性を有しているが、遺構外から出土した小片であり、確実な事例ではないため除外した(三重県埋蔵文化財センター2002『堀田 第3～5次調査』)。
- 34) 前掲註8)
- 35) 森田勉1983「滑石製容器―特に石鍋を中心として」『佛教藝術』148号 毎日新聞社、木戸雅寿1993「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎研究IX』日本中世土器研究会、杉原敏之2007「観世音寺出土の滑石製石鍋」『観世音寺―考察編―』九州歴史資料館など。
- 36) 出現期の石鍋は、福岡平野周辺で生産されていた可能性もあるが、10世紀代には西彼杵半島一帯での生産も始まっていた可能性が高いことが指摘されている(徳永貞紹2010「初期滑石製石鍋考」『先史学・考古学論究』V下巻 甲元眞之先生退任記念 龍田考古会)。
- 37) 新里亮一2002「滑石製石鍋の基礎的研究―付九州・沖縄における滑石製石鍋出土遺跡集成」『先史琉球の生業と交易―奄美・沖縄の発掘調査から―』熊本大学木下研究室、石塚宇紀2008「石鍋出土遺跡集成」『駒澤考古』第33号 駒澤大学考古学研究室など。
- 38) 梅川光隆1994「第4部第六章 錢貨その他の出土遺物」『平安京提要』。なお、近年の集成(前掲註37)石塚2008)には、平安京および近郊からのI類(耳付石鍋と考えられるもの)の出土事例として4例の記載がある。ただし、ある程度の高さが残っている口縁部片で、外面に鏝が認められないものであっても、鏝よりも上の部分を切り取って再加工したとみられる事例(財団法人京都市埋蔵文化財研究所2005『平安京左京六条三坊五町跡』)があるため、注意を要する。確実な耳付石鍋としては、他にも数例(財団法人京都市埋蔵文化財研究所2003『平安京左京四条二坊十四町跡』、同2007『平安京左京三条二坊十町(堀河院)跡』)が挙げられるが、極めて少数である。
- 39) 鈴木康之2006「滑石製石鍋の流通と消費」『鎌倉時代の考古学』高志書院。肥前守惟宗貴重から、万寿四年(1027)に藤原実資のもとに進められた雑物のなかに、「温石鍋」が含まれている。
- 40) 維叙は永観元年(983)、維敏は正暦四年(993)から五年、維将は長徳元年(995)には肥前守であったことが知られている(『類聚符宣抄』・『小右記』・『本朝世紀』・『権記』による)。
- 41) 『小右記』治安三年十一月七日条。大宰帥源経房が任地で死去した際に、藤原道長の命により平維衡が鎮西へ派遣された。

- 42) 平維衡の兄弟達については、同族としての緊密な協力関係があり、その後の肥前国に影響を及ぼすような存在であったという指摘がある(野口実1978「平貞盛の子息に関する覚書」『史聚』第8号 駒沢大学大学院史学会古代史部会)。
- また、註38)で平安京内での耳付石鍋出土例として挙げた左京三条二坊十町の調査地内には藤原顕光に伝領された堀川殿(堀川院)が含まれる。確実な遺構から出土したわけでもなく、わずか1例でことさら何かを言うつもりもないが、一応紹介しておく、堀川院については、長徳二年(996)頃、顕光の家人であった関係で平維衡が修造したとの指摘(高橋昌明2004『清盛以前―伊勢平氏の興隆―【増補・改訂版】』文理閣)があり、一族との関わりを示唆しているようで興味深い。
- 43) もちろん平正度は京にも屋敷を持っていたであろうし、常陸国や越前国など諸国の国司を歴任しているので、木造に常住していたかは明らかでない。このため「居館」と呼ばず、「屋敷」とした。
- 44) 『吾妻鏡』の「公卿勅使伊勢国駅家雑事勤否散状」(文治三年:1176)に勤仕せざる荘の一つとして「木造寮田」の名が挙げられている。
- 45) 稲本紀昭1978「斎宮寮とその経済」『研究紀要』第29巻第3号 三重大学教育学部
- 46) 保立道久1988「古代末期の東国と留住貴族」『中世東国史の研究』財団法人東京大学出版会
- 47) 古川淳一1993「斎宮寮に関する基礎的研究」『日本律令制論集 下巻』吉川弘文館
- 48) 文献史学側からも、平正度は「斎宮助の在任中に斎宮寮領の支配に関わり、木造寮田付近に開発された地を獲得し経営するようになった」との指摘がある(中野達平1996「久我家領伊勢国木造荘と北畠家について」『國學院雑誌』97(12)通巻1076号 國學院大學出版部)。
- 49) 前掲註8)
- 50) 問題点の指摘(竹内英昭2006「第143次調査」『史跡斎宮跡 平成16年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館)を受け、新たな編年試案の表が提示されている(大川勝弘2010「斎宮跡における平安期貿易陶器の基礎的研究」『斎宮歴史博物館研究紀要19』斎宮歴史博物館)が、第Ⅲ期第1段階は950～1030年付近に表示されている。

【図版出典】(一部転載)

- 図3 註6)・7)
- 図4 註9)・10)・13)・14)・15)
- 図5 註17)・18)・20)・21)
- 図6 斎宮歴史博物館1997「第114次調査」『史跡斎宮跡 平成8年度発掘調査概報』
- 図7 註15)・27)・28)・29)・30)